

あとかき Postscript

宮坂 瑠子

MIYASAKA, Yuko

総合人間学会では、学会誌（『総合人間学』）正式版を第7号より、電子ジャーナルの形態で発行している。電子ジャーナル学会誌としては2冊目となる第8号は、多くの方のご協力により、ホームページ上での公開をかなり早めることができた。

当学会が電子ジャーナル形態での学会誌発行に踏み切ったのは、第1に、デジタルメディア時代を迎えて、学会誌、学術誌の電子化は世界的な流れとなりつつあり、研究のグローバル化も急速に進んでいることを考慮したためであり、第2に、電子ジャーナルは、紙媒体の書籍のもつさまざまな制約（頁数や紙の質など）から自由であり、紙媒体の書籍ほどパッケージとしての個性を主張せずに、コンテンツの柔軟な構成が可能となるためである。本学会誌が、今後さらにインターネットを通して国内外の研究者との広範な学術交流や議論のたたき台となることを望んでいる。

『総合人間学 第8号』は、第一部と第二部で構成されている。

第一部は、総合人間学会が2013年6月8、9日に開催した第8回総合人間学会研究大会でのシンポジウムテーマ『人間関係の新しい紡ぎ方—3.11を受けとめて』を、シンポジストのみならず、様々な学問分野の方々に論じていただいた内容で構成されている。

この第一部は「序に代えて」、およびI—IVで構成されている。木村氏の「序に代えて」からは、総合人間学会が、〈3.11〉後の地球未来に責任を持つ人間の生き方を執拗なまでに問いかけ、私たちは何を成すべきかを突き詰めて考え続けてきた熱い思いが伝わってくる。

Iでは、文明のあり方、人間の生き方、人間関係の様相の根底にあるものを問い、人と人とのつながりの意義を追究することによって、人間とは何かという根源的な問題に迫る。

岩田氏は、過酷な災害が人間の存在の根源にある「他者とのつながり」の温かさ、絆の根底にある「共苦」の感受性を浮き彫りにしたと主張する。渡邊氏は、〈3.11〉を人間の文明の問題と捉え、危機に瀕したとき必要なのは原初的關係であるとして、「アタッチメント」の意義に注目する。穴見氏は、「物象化」を脱する人間関係の追究に、生産活動における人間と自然との関係性を視点に据えることの重要性を説く。片山氏は、自然を基盤とした人間観に立ち、存在しない他者（かつて存在した他者、未来に生きる他者）をも組み入れた共生の人間学を提案する。

IIでは、〈3.11〉後に進められてきた地域社会やNPO活動による人々の支え合い、現代の環境として看過できない情報メディアが人間関係に与える影響、さらに巨大技術を生み出した近代文明がもたらす社会環境が取り上げられている。古沢氏は〈3.11〉の

ような個的存在を揺るがす事態においては、低層に隠れていた共的な存在の意義が増すと主張し、地域の自主的管理・運営による協同組合的理念に基づく復興に期待する。杉山氏は〈3.11〉後の人間関係に通底する過疎地域の地域振興を取り上げ、NPOの活動などを通じた支援、ボランティアによる「贈与」の相互性を重視する。吉田氏は現代情報メディアが、過酷な被災経験を記録し共有する「情報のアーカイブ化」によって、将来の備えと共同体の回復に果たす役割を認めながら、皮相的なコミュニケーションの拡大、電子空間における自己の肥大化、デジタルデータにおける個々の人間性の喪失など、その負の側面を浮き彫りにする。木下氏は己の欲望の充足と利益追求に狂奔する近代文明がもたらした原発事故、巨大技術の問題性を抉り出し、価値基準の根本的転換、自己制限とシェアの叡智の必要性を強調する。

Ⅲでは、〈3.11〉後の人間関係の危機的な深層の現実に焦点を当て、臨床の知、パトスの知を問う。清氏は、被災者に限らず最近の青少年たちにおけるイジメの状況が明らかに深刻化していること、教室空間がイジメ共同体と化した状況に孕む実存的問題性に眼を向け、イジメ経験とポジティブな経験とのヘゲモニー争いに解決の糸口を見出す。横湯氏は、臨床心理士として継続的に被災者の心のケアにあたってきた経験から、真の癒しとは被災者固有の仕方として為されるべきであるとして、語ることを語らないことを大事にしつつ聴く姿勢を忘れないことの大切さを主張する。

Ⅳでは、フクシマの事故やエネルギー問題を海外——韓国とドイツ——ではどう受け止め、どのような課題を抱えているのかが論じられている。水野氏は、韓国政府の原発推進に対する市民の危機感という日本と同様の構図に注目する。さらに歴史的経緯

によって反日感情を強く抱いている韓国の人々の震災当初の日本への温かい支援、その後の教科書問題等への反発による募金熱の低下といった心の揺らぎが語られる。イエーガー氏は、脱原発の論理的帰結としてエネルギー転換に踏み出したドイツが克服すべき課題を明らかにするとともに、ドイツの課題を踏まえて、日本におけるエネルギー転換の道程への手がかりを示唆する。

震災後の復興をグローバルな経済成長戦略によって実現しようとする立場からは一人ひとりの人間、その生活と心、人と人との関係が見えてこない。本書では、人間性、人と人との関係、自然と人との関係等の問題に迫る鍵となる言葉が随所に現れる。本書をテーマに沿って読むだけでなく、別の視点——人間性に関わる言葉がどのような文脈で使われ、どのような概念、思想の母胎となっているのか——から読み解くと、人間関係を新たな地平で捉えることができるであろう。本書において多出する関係性を示す言葉として、「他者」「絆」「共同体」が挙げられる。他者は、自己のアイデンティティを形成するためにも、精神的営みや労働をおこなうときも、必要不可欠である。しかし〈他者〉は自分を傷つけ排除する存在ともなる。では、自分は果たして環境・立場の異なる他者を慮ることができるだろうか。他者とは自分にとってどのような意味を持ち、自分は他者にどのような影響を与えるのだろうか。

共同体、絆も人と人との関係性を示す重要な言葉であるが、いずれも両義的性格をもつ。被災地の住民やボランティアから成る共同体は、震災からの復興に立ち上がる原動力となったことは確かである。その反面、共同体という閉じた構造の中で異質な者を排除することもある。また「絆」は、温かい結び

つき、支え合い、助け合いを表し、〈3.11〉後もつとも多用される言葉となった。だが、この言葉は、原義が家畜をつなぎとめる綱を意味するように、人間を縛り、抑圧するものともなる。本書において、さまざまな文脈で語られている「他者」「絆」「共同体」などの関係性を表す言葉の吟味が、複雑な人間関係の様態についてより深く捉える契機となるにちがない。

なお、この第一部の内容は、会員、非会員を問わずご高覧いただくことを願って、この書籍版を学文社から『総合人間学会 8号 人間関係の新しい紡ぎ方—3.11 を受けとめて』の書名ですでに出版している。電子ジャーナル学会誌が学術誌としての性格上、やや難解な専門用語を含むものであるのに対して、書籍はわかりやすく平易な内容になるよう心掛けたので、学生の方や周囲の方に是非お勧め願いたい。

第二部の巻頭には、「総合人間学の課題と方法」と題して、本学会の中心的テーマを据えた。総合人間学の「総合」とは何か、今、どのような視点、方法により、人間を問い直し、新しい発展を追究すべきか、等々の重要課題を、第二部巻頭で継続的に論じることで、総合人間学の知のシステムを構築する手がかりを得ることをめざしたい。

巻頭論文としての 1 回目は、堀尾輝久氏（2014 年度より当学会会長）による「総合人間学とわたし人間とは何か—その総合的認識をもとめて」を掲載した。この中で、堀尾氏は自身の研究歴を辿りながら、思想家、恩師、とりわけルソーをはじめとする総合人間学の先駆者たちから学んだことがどのよう

に氏の問題意識を醸成し、思想形成に導いたかを語る。総合人間学に関心をもつ研究者、とくに若い研究者の方に、お読みいただくことを願っている。

なお、第 7 号では書籍版および電子ジャーナル学会誌第一部において、三浦永光氏と上柿崇英氏がそれぞれの視点からこのテーマを論じているので合わせてお読みいただきたい。

次に述べる「論壇エッセイ」というジャンルは、論文とエッセイの中間的形態に位置づけられ、総合人間学の課題や論点を自由に提起して論じるフォーラム的ジャンルとして期待されている。今回は 3 氏にお願いし、それぞれの専門分野から語っていただいた。

河野貴美子氏は脳科学者の立場から「脳から考える総合的な人間学」を論じている。地球上の生命はどのように誕生し、いかにしてヒトに進化したか、さらにヒトを「人間」にまで進化させたものは何なのかを論じている。最後の部分で、氏が、「自然との直接対話無しに、最初からバーチャルとの対話で育つ脳」に関心を寄せているように、人間の作り出した文化、科学技術が人間の発達を妨害する危機に瀕しているのではないかと、という問題は、本学会が真剣に追究すべき喫緊の課題である。

武田富美子氏は「学習における当事者性を育むには」と題して、教員志望の学生たちが授業で考えるテーマとして取り上げた沖縄の基地問題、特定秘密保護法についての学生たちの無関心と当事者意識の無さに注目する。氏は学生たちに研修体験を通していかにして主体性、当事者性を育てることが可能か、その過程で教師はどのような役割を果たすべきかを問うている。

吉田傑俊氏は長年取り組んでこられた「近代日本思想論」三部作をこのほど完結された。その三部作

を通して氏が追究してきたことを論壇エッセイで語っている。氏は、論壇エッセイのなかで、日本の近代化を担ってきた代表的知識人たちの光と影、かれらによる民衆の声の代弁の仕方を考察し、日本の知識人と民衆の共有の財産である憲法の人類的意義にまで言及している。

海外特別寄稿では中国の研究者、郭玲玲氏による論文（布施元氏訳）を掲載した。論文は、「人間の文化的生活に対する発展倫理の影響」と題して、技術的文化的支配に対する倫理的文化的回復を希求し、現代における「発展倫理」の重要性を説く。

総合人間学会は、日本の研究者ばかりでなく、さまざまな国の研究者との交流を通して、幅広い視野から総合人間学的研究の成果を蓄積していきたい。

一般会員からの投稿による論文・エッセイ・報告は、本学会の厳正なる査読を通過したものである。査読の結果、掲載に至ったのは、論文9編、エッセイ1編である。今回は投稿論文が多数にのぼったため、査読を通過した論文も前号よりかなり多くなった。

当学会は、その性格上、多様な関心、多様な専門分野の方から投稿論文・エッセイ・報告が寄せられている。会員にとって、それぞれの関心、専門を越えて異なる分野の視座、知見を学ぶことのできる場でもある。掲載されるにいたった研究成果は、それぞれ読み応えのあるもので、互いに学び合い、啓発しあうことができれば幸いである。

次に掲載したのは、第8回研究大会より初めて企画・開催した若手シンポジウムの報告である。本誌には初回のテーマ「〈古い〉を考える—近代化・自立・尊厳」についての澤氏による趣旨説明、3名の若手部会のシンポジストがそれぞれの関心から行っ

た報告を掲載した。初めての試みであり、これからも、若手研究者たちの研究の発展、意欲的な挑戦を期待している。

なお、昨年より、若手研究者を対象として優れた投稿論文に対する「若手研究者奨励賞」を新設し、今回初めて、学会選考委員会によって上柿崇英会員、布施元会員の2名が選ばれた。本誌の「若手研究者奨励賞の発表にあたって」には、その選考にあたった学会選考委員会のことば、および受賞者のことばを掲載した。両会員にはあらためてお祝いの辞を送りたい。

今後も若手研究者の会員の方たちには、互いに切磋琢磨しあい、精力的に研究成果を発表し、論文を応募されることを願ってやまない。

また、7号電子ジャーナル学会誌より、会員の新刊書紹介コーナーを設けている。これも電子ジャーナルの特性ゆえに実現したことである。この電子ジャーナル読者の方には、是非会員の著書も手に取っていただきたい。

◇本学会誌の電子ジャーナル化、およびその編集は、ひとえに当学会編集幹事、東方沙由理氏、菅原由香氏、ホームページ担当の吉田健彦氏のご尽力によって実現したものであることをご報告し、3氏に心より感謝の意を表したい。

宮坂 瑋子

（東海大学名誉教授・本学会編集委員会委員長）